

# 益寄滋雄先生を偲ぶ



## 入来院重朝

昨年十号に書いていただいた「肺癌の記」

を二度三度読み直しました。たんたんとして事案を経過に沿って報告されている。そして死の方について先生は一つの方法として思うところを懇切に述べておられる。最後に「終末期医療ケアへの意志表明書」(サンプル)を示していただいている。間然として見事です。悠揚として迫らぬ日常の先生のお人柄そのものです。

昨年十一月私は旧い友人に誘われて境港にカニを喰いに行つて翌日十八日駅前で昼シシをつまみ出雲に向かつて列車を待つていたと

ころケイタイが鳴りました。先生でした。九月二十五日私の誕生日にセイ談会の集まりがありました。一寸遅れてみえた先生と私は皆さんがお帰りになったあと二人で亡き女房が恋しいと言ひ合つて呑みながら、次は先生の十二月の誕生日確か十四日に一緒に呑む約束をしたのでした。

それがどうしても果たせないと云うのです。入院中の病院からの電話でしたが、少々声に張りがなかつた気がします。いよいよダメかと私は思いました。翌十二月二十二日午後四時五十一分先生は八十二歳の生涯を閉じられました。

告別式でなつかしい人々に会いました。

宮之城ロータリークラブのメンメンです。

私が先生にお会いできたのもすすめられてそのクラブに入会したからです。東京から引き揚げてきたのが平成七年でしたが、それか



益壽滋雄先生遺影（自ら写真館に出向かれて撮影された）

らしばらくして私が無聊をかこっていると思  
ったかそのクラブの幹部の方々が入会を勧誘  
にみえられたのでした。妻貞子もすすめてく  
れました。私は週一の呑み会があるというの  
につられたのでした。その会で地方のそれぞ  
れの分野で活躍されておられる方々と仲良く  
なったのですが、特に益寄先生とは少年期  
の友人の一人が共通であり仲良かったことで  
特に親しくなつたのです。週一の呑み会には  
毎週妻貞子が迎えに来てくれました。

それから数年たつて私が軽い脳梗塞で一週  
間ばかり入院したのを期にクラブを退会した  
のでした。先生とは連絡が絶えずセイ談会  
三号に「悪口雑言」を書いていただきました。  
これは題に似ずわが国と国家に永久的な屈辱  
と不名誉と損害をもたらした「河野談話」へ  
の寸言です。四号に「老人党を立ち上げよう  
」八号に「裁判員制度は司法の逃げではない

か」とそれぞれ納得「我が意を得たり」とヒ  
ザを打ちたくなるのです。

五号に「二つの遺影」をいただきました。  
この文章は亡き愛妻への思いが切々と語られ  
ていてその出会いから最後の看取りに至るま  
での委細が語られています。彼は中学・高校  
時代ラグビーの選手でその大メシ喰いは「十  
ペドン」と云われた程であったとか、その恰  
幅のよさは今や御召しの着物で呑み会に現れ  
るとほればれするのです。今亡き愛妻への  
切々たる思いを読みますと涙が出てきます。  
さて人は皆かけがえがありません。今益寄  
先生を偲ぶに当って浅からぬご縁をいただい  
たことへの感謝と私の妻貞子の亡きあと再び  
畏友を失つた悲しみと淋しさをあらためてか  
みしめているところです。

(炉ばたセイ談庵主)